

小論文

次の文章を読んで、あとの【問】に答えなさい。

渡部信一氏によると、自閉症児の偏食は、障害のない子どもの偏食とは比較にならないほど深刻だという。一人の自閉症児の偏食を改善するために、「偏食を治すため」の三泊四日の合宿に参加させた。合宿の基本方針は「三食とも野菜中心」というものだった。「お腹が空けば、嫌いなものでも食べるだろう」という考えからだ。しかし、残念ながら、彼が三泊四日のあいだに口にしたのは、水だけだったとのことである。スタッフはなんとかして果物や野菜を食べさせようとあらゆる手段を講じたが、彼はがんとして拒否したという。まさに「死んでも食べない」様子だったという。

ところが、このようにすさまじいまでの偏食傾向をもつ自閉症児が、幼稚園や保育園に入園し、集団生活をしているうちに、まるでウソのように、偏食がなくなってしまうケースがしばしばあるという。渡部氏はそのような事例をいくつか丁寧に観察した上で、次のような分析をしている。

まず、入園前に偏食について「専門家の指導」を受けたケースもあるが(たとえば、食べ物をまったく噛もうとしない子どもに、歯科医から特別な器具で舌の運動を訓練するという「治療」を受けたなど)、まったく改善されなかった。また、親や保育士が「子どもの気持ちをくみ取ろう」として、食べる楽しさをわからせようと、ありとあらゆる手だてを講じたが、ほとんどすべて、頑強に拒否されてしまっていた。ところが、健常児の集団のなかで、健常児が「ごく自然にかかわる」中で(たとえば、障害児のお弁当のなかのものを「ちようだい」といつつつまんだり、「おいしそう」と歓声をあげたり、当該の障害児がちよつと口に入れただけで「あ、食べたよ、食べた!」といつて大喜びをしたり……)、「いつのまにか」食べるようになってしまうのだという。(中略)渡部氏は、そこでの子ども同士のかかわりは、保育のかかわりの原則とされる「相手の気持ちをくみ取ってかかわる」というようなものではなく、むしろ、あまり相手の気持ちをさぐったりせず、ただ「いっしょに」という気持ちをたがいに高めあっているだけだという。

(出典：佐伯胖『幼児教育へのいざない』二〇一四※一部改変あり)

(注) 現在は「自閉スペクトラム症」という。多くの場合、コミュニケーションや社会的相互作用において困難を示す。問題文の幼児のように偏食を伴う場合もある。

【問】問題文のなかで取り上げられている障害児の事例において、なぜ偏食をせず食べられるようになるのか、あなたの考えを六〇〇字以上八〇〇字以内で述べなさい。

